

「だんらん」  
特別寄稿  
②

どんな子でも、ひとりでできるようになりたい。  
前の自分より、よくありたいと思ってる。生きてる。

田中 博子

わが家の8歳になる三男が、ある日、鍵を持ちひとり帰宅した。もちろん家にはだれもいない。

おやつを食べながら、ふと壁を見る。兄の鍵だ。

『そうか、忘れたんだ。遊びに出たいけど、閉めたら兄ちゃんが入れない。かけないと泥棒が入る…』

必死に考えた三男は、いい事を思いつく。

『鍵を隠し、その場所を手紙に書けば、お兄ちゃんは家に入れる』

彼は、手紙を書いて、外に出た。そして、今閉めた玄関の鍵穴の上に貼った。もちろん手紙どおりに鍵も隠して。

わが家で起こった『かぎ事件』。帰宅した私は、いつものように兄

弟げんかに行くわす。

「もし、泥棒が手紙を読んだらどうするー」

「バカやなあー！」

「考えが足りんー！」

三男に意見する二人。三男は自分の考えを精一杯話す。

「だってい…」

私は三人の話を聞きながら考える。

手紙を鍵穴に張った事の善しあしはすぐわかるだろう。それはさておき、兄を思う気持ちを大切にしたい。

私は上二人に説明をした。彼は今のあなたたちのように独り立ちする練習中であること、あなたたちも昔は鍵を無くしたり、失敗が何度かあったこと、そして彼のあなたたちへの『思い』を。

二人は、自分の時を思い出し、ちよつと兄さん気分になっていた。

子どもたちとの生活は事件の連続。時に周りの人々に大変な迷惑をおかけして(ゴメンナサイ)。

でも、子どもたちは、自分が考えたこと、行動したことは善かったのか悪かったのか。

何がいけなかったのか。

どうすれば、一人で、できるように

なるのか、さまざまな事件を通して学んでいる。

そして、親は、そのあらゆる場面で試される。

どこまで『思い』をくみ取ることが

できるのか、どう接すれば子どもが育つか、また何を善しとするのか。

親として気長

に根気よく。(単純、短気な私は、これが難しい。怒鳴って終わることのほうがいい)

子どもたちは、真剣に生きている。だから事件も多くなる。子どもはどんな子もひとり

でできるようになりたい、前の自分より、よくありたいと思ってる。生きてる。

